

北欧語から英語への借入語としての Troll

(Trolls from Tegnér to Tolkien: A Short Survey on 'Troll' as a Loan-word in English from Scandinavian Languages)

伊 藤 盡 (j-tksito@shinshu-u.ac.jp)

キーワード：借入語 英語史 古北欧語 民俗学 翻訳

0. はじめに

OED が英語語彙の「履歴書」であることは論を待たない。しかし、英語語彙の中の 'supernatural' な存在に関する定義などについては、Tolkien の批判からも、必ずしも満足のいくものでないことは察せられる。¹*OED* の編纂が folklore という学問分野の黎明期に始まったこともあり、ある程度の民俗学的記述はあるものの、不十分な観は否めない。その中でも、北欧語からの借入語として troll に関する項目は、履歴書としての機能が不十分である。そもそも北欧語から英語への借入語研究も21世紀になってようやく活気づいてきた分野でもあり、ここに紹介するような部分でより詳しい調査が求められる。その一方で、troll については、日本でも「トロル」「トロール」という語彙として、昨今のコンピュータ・ゲームやファンタジーの世界でイメージがどんどん拡充していることは明らかであるが、本論の枠組みを越えるため、詳細は別稿で取り扱いたい。本論では、troll という語彙に関して英語話者の持つイメージが、19世紀から20世紀にかけてどのように変化したかを概観する。

1. *OED*, *MED* などの辞書的定義

もともと北欧語の語彙であった troll が英語に初めて借入されたのはいつなのだろうか。*OED* に依れば、英語に借入されたのは19世紀半ばであるというが、シェトランド及びオークニー諸島では既に17世紀に借りられたということである。いずれにしても、the Modern English [ModE] Period 以前に借入された可能性に触れてはいるが、飽くまでも ModE 文献の資料のみを扱うというのが *OED* の姿勢であるかのようだ：

(Adopted in English from Scandinavian in the middle of the 19th c.; but in Shetland and

¹ Tolkien の *OED* の定義に関する時に critical, 時に satirical な態度は、'On Fairy-Stories' (p.175), *Farmer Giles of Ham* (pp. 15, 111), *The Hobbit* (p.1; *The Lord of the Rings*, Appendix F, p. 1494 参照) などに見られる。また、伊藤2010, pp. 183, 196-204も参照。

Orkney, where the form is now TROW (in 1616 *troll*), it has survived from the Norse dialect formerly spoken there.)

a. In Scandinavian mythology, One of a race of supernatural beings formerly conceived as giants, now, in Denmark and Sweden, as dwarfs or imps, supposed to inhabit caves or subterranean dwellings (*OED troll* n.²).

これによれば、trollとは、北欧神話に登場する存在で、以前は巨人と思われていたが、デンマークやスウェーデンではドワーフやインプのように小さくなり、洞窟や地下に住む者と定義されている。つまり、神話の伝承された中世以来、この語は存在するものの、標準英語への借入は19世紀まで待たねばならなかったという見解である。

オークニー諸島の魔女裁判の記録が*OED*に次のように引用されているが、この文脈ではtrollもしくはtrowが巨人かどうかは不明である。

1640 *Orkney Witch Trial in Abbotsford Cl. Misc. I.* 167 3e answered hir againe, that it was but the Trow that haid gripped her (*OED trow*, n.4)

しかし、原典に当たる時、むしろ魔力を持った存在としての目に見えないtrowが被害をもたらしたことになっている。

"Thy mother hes bein tailing tealls of me, but I sall put a buckie in her scheek for that, that all her kinne sall never get out: So it cam to passe that thair grew a great byle vpon the said Jonet's left cheek, which disfigured her face, by drawing her mouth vp to hir right eare, as is manifest: Wharvpon the said Jonet, finding hir self thus tormented, scho sent for yow, and reproved you, and said to yow that ye had witched hir; ye answered hir again, that it was but the *Trow* that haid gripped her; and vpon the nixt day thairefter, ye cam to the said Jonetis hous befor day, and brought with yow the *Trowis* gloue, and folded the same about the said Jonet's craige thrie several tymes, and vpol the thrid day the byle brak; but, as all people may sie, the said Jonet's mouth is not as it was wont to be (*Abbotsford Club Miscellany*, vol.i. pp. 135-142. *Trial of Katherine Cragie*, alias Estquey, 1640, emphases added).

(お前の母親が私のことを話してくれたが、私が彼女の頬に渦巻き貝を当ててやれば、それで傷はなくなるはずだった。しばらくするとその傷はジョネットの左の頬で大きく腫れあがり、顔が歪んでしまい、彼女の口の端が耳まで見るからに上がってしまった。そこでジョネットは自分の酷い有様に驚いてあなたを呼び、あなたが魔法をかけたと言った。あなたは彼女に再び答えて、あれはトロルがお前に憑いただけだと言った。次の日の未明に、あなたはジョネットの家にトロルの手袋を持って訪れ、それでジョネットの傷の上を三度も覆った。それから三日後、囊腫は破裂し〔腫れは治っ〕た。だが、誰もがわかることだが、ジョネットの口の様子は以前のようなではなくなってしまった。)

法廷での口述筆記に基づくこの記録は、主語が入れ替わるために分かりにくいですが、要は件の

被告人 Katherine Cragie は, Jonet なる女性の傷を治す力があるのではないかと噂から治療を頼まれ, 貝を当てて治療したが, その民間療法ではかえって傷が悪くなるばかりか, 口が歪んでしまった。そんな酷い有様になるには, きっと悪い魔術をかけたのだろうと非難されたため, 彼女は手袋のような魔力を秘めたものをあてがって腫れを直したが, 一度歪んでしまった口は元通りにはならなかった, という顛末を語る。そして, ここでは *trow* という語が二度現れるが, どちらも魔物とか超自然の力を持ったものを指している。つまり, 巨人であるということと *trow/troll* の初出例とは関係がないということである。

このことを裏付けるように, *MED* の初出は, *OED* よりも早く1400年頃である :

trol (n.) Also (NEM) **trulle**.

(a) ?A sorcerer or demon; --used in *fig.* context; (b) in surnames and place name.

?a1400 (a1338) Mannyng *Chron.Pt.2* (Petyt 511) p.281:Ðe Trulle þe[i] dreng on se. (彼らはその trull たちを海で溺れさせた)

この *MED* の定義からも, troll とは巨人というよりも「魔物」もしくは「魔術を使う者」という意味で理解されていることがわかる。更に, 人名になると, *MED* では1212年 *Curia Regis Rolls Preserved in the Public Record Office*, part 6 からの Willelmus Trol という人物の記録がある。ここからは troll という語が, 文献に現れる以前から口承で英語に入ってきていた可能性が窺われる。

古北歐語と同一視されることの多い古アイスランド語ではどのような意味を持っていたのであろうか。Cleasby and Vigfusson の辞書の定義で確かめてみる :

TROLL n. the later but erroneous form is **tröll**; the rhymes require it to be troll; thus troll and ollu, Fms. vi. 339; troll and kollr, Sturl. ii. 136 (a ditty); troll and sollinn, Rekst., Landn. 212 (in a verse); and so spelt in old vellums, trollz, Vsp. (Kb.) 39; in later vellums tröll, Mar. 1055; and so rhymed, tröll, öll, Mkv.: [Dan.-Swed. *trold*; Low Germ. *droll*, whence the mod. Dan. *drollen*; cp. also trylla and Dan. *trylde*=to charm, bewitch]

A. A *giant, fiend, demon*, a generic term. The heathen creed knew of no 'devil' but the troll; in mod. Dan. *trold* includes any ghost, goblins, imps, and puny spirits, whereas the old Icel. troll conveys the notion of huge creatures, giants, Titans, most in an evil, but also in a good sense; Þórr var farinn í Austrveg at berja troll, Edda; þar mátti engi maðr úti vera fyrir trolla-gangs sakir ok meinvætta, Ó. H. 187; et mat þinn, troll, Fas. iii. 178.

このように, 巨人であると同時に魔物としての一般的な名詞との定義が為されている上, 現代デンマーク語 *trold* では英語の *goblin* で表されるような霊的存在であるのに対し, 古アイスランド語では, よい意味でも悪い意味でも巨人であるとされる。現代では, troll は東-北欧語圏では小さな姿を取るようになったと考えられているようだ。

だが, 古アイスランド語においても, troll が持っていた意味は必ずしも「巨人」に限らなかったことは, 次のような *Völsunga Saga* の一節を見てもわかる :

En þat er sagn sumra manna, at su hin sama ylgr veri modir Siggeirs konungs, ok hafe hun brugdit a sik þessu like fyrir *trollskapar* sakir ok fiolkyngi (Kap 5, p.12, emphases added)
(だがある人々は、この雌狼はシッゲイル王の母親だと言っている。彼女はトルルの技と魔術によってこの姿に化けることができたというのである)

このように、古アイスランド語で *trollskapr* とは「魔術」と同義であることがわかる。むしろ、Cleasby-Vigfusson の辞書の定義が如何なるものであれ、このような語義から本来の *troll* は「魔物もしくは魔術を操るもの」、「あやかし」のような意味を持っていたことが予想される。

なお、William Morris 訳では *trollskapr* は *troll's lore* としているⁱⁱ。Morris はアイスランド人 Eiríkur Magnússon にアイスランド語の教示を受けているが、この場合は、後にアイスランドの *þjóðssögur* に見るような巨人としての *troll* ではなく、*witchcraft* の意味である。もちろんこの *lore* は、「伝承」「学び伝えられる知識や技術」という意味に解釈すべきである。

また、de Vries の語源辞典でも語源は不明としながら、北欧語からイングランド、オークニー、シェトランド、ヘブリデーズ諸島へと、この語の広汎な拡がりを示している。また新高独語で *troll* が「太った人」を意味するところから、もともとの意味は「小妖精が灯したと想像された球電現象 (*kugelblitz der koboldvorstellung*)」ではないかと推測する (de Vries 598-99)。

このように考えてくると、アイスランド語およびノルウェー語という西-北欧語系の語彙に「巨人」という意味が付加されたのは、後世になってからだと言うことになる。しかし、いつ頃からそのような意味が付加されたかについては、不明確と言わざるを得ない。漠然と、ノルウェー人がアイスランドへの移住して、古ノルウェー語をアイスランドにもたらした9世紀後半を *terminus ante quem* とするに留まる。英語においては、どのような意味を持つと理解されていたのであろうか。

2-0. 19世紀半ば以降の *troll* 借入

上に見たように、*OED* の定義によれば、*troll* という語が北欧語から英語に借入されたのは19世紀半ばということだが、それは何故なのか。19世紀半ばの言語的背景を概観しよう。

Andrew Wawn は *The Vikings and the Victorians* の中で、19世紀の英国が如何に中世北欧のイメージに魅了されていたかを披瀝してくれている。特に19世紀半ばは、スウェーデンの主教 Esaias Tegnér の詩 *Frithiofs Saga* (1825) の、少なくとも15編もの英語訳が出版された時期 (1833-1914; Wawn 121) と重なり、元外交官のロンドン大学キングズ学寮英語英文学教授 Geoge Webbe Dasent の主たる北欧の文献学を紹介する3大著作が上梓された時期 (1858-61; Wawn 148) でもあった。すなわち、この時期に、英国では中世北欧の神話や伝説・サ

ⁱⁱ But some men say that this same she-wolf was the mother of King Siggeir, who had turned herself into this likeness by troll's lore and witchcraft. (Chapter 5, *Völsunga Saga*).

ガへの関心が高揚し、多くの北欧の文化が書物を通じて英語圏に入ってきた時期と言ってよい。研究書も執筆されたが、サガ文学、神話詩などが幾つも翻訳された時代だった。特に troll との 関 連 で は、'Frithiofs Saga' の 英 訳 と Peter Christen Asbjørnsen と Jørgen Engebretsen Moe の *Norske Folkeeventyr* (1843) の英訳が重要である。

2-1. Esaias Tegnér の *Frithjofs Saga* の英語訳

Tegnér の *Frithiofs Saga* の最初の英訳は1933年だが、ⁱⁱⁱWawn によれば1939年の George Stephens 訳は17枚のリソグラフが付けられていて、それらは 'an early display of what became staple items in Victorian old northern iconography (Wawn 123)' として受け止められた。^{iv}

風景を描いたイメージはリソグラフで伝わるであろうが、このサガに見られる超自然的な力、魔術的な力がどのように訳されたのかを見ると、troll という語の持つ意味が、19世紀半ば頃を境に変わっていることに気がつく。Tegnér の原典には、「巨人」を表す語として troll とは異なる語 jätter が用いられている。こちらは古アイスランド語 jötunn、および古英語 eoten と同語源であり、troll とは異なり、明らかに体躯の大きい存在を意味している (de Vries, 'jötunn')。

ここでは Tegnér の詩から Canto III, X のそれぞれに現れる巨人がどのように英訳されているかを見て、確認したい。比較する訳は Latham (1838), Stephens (1839), Baker (1841), Hamel (1874), Holcomb, & Holcomb (1877) である。翻訳一覧を示すと次のようになる。

Latham (1838) *Frithiof, A Norwegian Story, from the Swedish of Esaias Tegnér*. Tr. R. G. Latham. London: Hookham.

Stephens (1839) *Frithiof's Saga, A Legend of the North by Esaias Tegnér*. Tr. G[eorge] S[tephens]. Stockholm: A. Bonnier, 1839.

Baker (1841) *Saga of Frithiof: A Legend*. Tr. Oscar Baker. London: Edward Bull.

Blackley (1867) *Frithiof's Saga*. Tr. William Lewery Blackley. New York: Leypoldt & Holt.

Hamel (1874) *Esaias Tegnér's Frithiof's Saga*. Tr. Leopold Hamel. London: Trübner.

ⁱⁱⁱ *Frithiofs Saga* が当時の英国社会にどのようなインパクトを与えたかについては、Wawn 117-141、特に121-23を参照。

^{iv} 図版には頁数も図版番号も付されていない。ここでは便宜上、Stephens 訳 (1839) に掲載された順番に番号を付して示す：1. Frithiof's Bauta-Stone (Sogne Fjord, Bergens Stift, Norway) 2. Es. Tegnér, Portrait 3. Framnas from Balder's Strand 4. The Cairns of King Bele and Thorsten Vikingsson.(Kung Beles och Thorsten Vikingssons Höggar) 5. Thorsten Vikingson's Hall (Sal) Resored according to descriptions in the Sagas(Composition efter Sagorna) 6. Balder's Strand (Sogne-fjord, Bergens stift, Norway) 7. Balder's Holm (Bal Holmen) (North View) 8. [Pseudo-Viking tapestry with Runes] 9. Ingeborg's Harp 10. Ellida [a Viking Long Ship] 11. Scandinavian Drinking-Horn and Lur (Trumpet) 12. Scandinavian Battle Field (Slagfält) (with the Burial-Cairne of the Chiefs) (Med Krigs-Kämparnes Graf-höggar) 13. Sogne-Fjällen (From Ennes Church, Bale-(Balder's)-Strand) 14. King Ring's Sledge 15. Scandinavian Rune-Stone 16. Scandinavian Ting-Place ('the stone circle at a Thing site' Wawn 123) 17. The Temple of the White God Balder.

Holcomb & Holcomb (1877) *Frithiof's Saga: A Norse Romance*. Tr. Thomas A. E.

Holcomb and Martha A. Lyon Holcomb. Chicago: S. C. Griggs.

Canto III では、主人公 Frithjofr の父 Thorsteinn が客をもてなしながら自分の冒険を語る時、自分の剣 Augurvadel の来歴に触れ、かつての持ち主 Viking の前に巨人が現れる場面を物語る（イタリックは全て引用者による。以下の Tegnér の詩と訳文も同様）：

Se, då kom det ur skogarnas djup en oskapelig *jätte*,
högre till växten än människors ätt och luden och vildsint (Canto III, ll.64-5)

Lo! from the forests darkest dens there came, / An *eldritch monster* of unearthly frame,
/ Savage and strong, and more than mortal tall, (Latham: 26)

Just thereupon, from the woods' deep shades, came a grim-looking *Giant*, / taller by far
than other men, and all hairy and savage (Stephens: 33)

When lo! a shapeless *giant* from the wood, / Shaggy and wild, before the monarch stood
(Baker: 24)

When lo! a shapeless *giant* from the wood, / Shaggy and wild, before the monarch stood
(Hamel: 26)

See, from the depths of the forest there cometh a *giant* misshapen, / Higher in stature
than man, a monster ferocious and shaggy, (Holcomb & Holcomb: 23)

以上のように、'an eldritch monster' と訳した最も初期の Latham 以外すべて *jätte* は a *giant* と英訳されている。一方、Canto X の §7 では、主人公の敵役 Helgi の魔術によって、主人公たちの乗るヴァイキング船 Ellide が酷い嵐に遭遇する。この嵐は、Helgi が魔術で呼び出した二人の troll によって引き起こされていると語られる。この場面では、trolldom という語彙が原詩では用いられている。すなわち名詞 troll にさらに抽象名詞化を行う接尾辞 -dom による形態で、怪物としての troll ではなく、嵐を引き起こす原因を表すものとなっている。この場面での英語訳者は、興味深いことに、「魔術」を表そうとする姿勢と、あくまでも「怪物・魔物・妖怪・妖精」といったものと絡めて訳出しようとする姿勢とに分かれる。

Trolldom är å färde: Helge niding kvad den säkert över vågen (Cant X, § 7)

There is *witchcraft* stirring, / Helge craven-hearted / Spell-enthalls the waters
(Latham: 89)

Witchraft's working! HELGE, / Coward-scoundrel, doubtless / Conjur'd has these

billows (Stephens: 102)

Demons here are struggling; / Coward Helge sent them (Baker: 77)

Trolls must here be working, / Sent by caitiff Helg (Hamel: 97)

Goblins rule the voyage; / Coward Helge chanted (Holcomb&Holcomb: 96)

一見して明らかなのは、Baker 1841 年を境に、それ以前は原語 *trolldom* を魔術・魔法として理解していたが、それ以降は「怪物もしくは魔物が働いている」という理解に変わっていることである。さらに同じ Canto X の §8 では、遂に嵐を起こす魔物が鯨の上に乗って現れる（イタリックは全て引用者による。以下の Tegnér の詩と訳文も同様）：

Se, då simmar för Ellida havsval, lik en lossnad ö, och två leda *havstroll* rida på hans rygg i skummig sjö. (Canto X, §8)

Like a loosened isle in motion /'Neath her bows he sees a whale; / On it, o'er the foaming ocean/Two grim *water-demons* sail (Latham: 89)

Look! -as isle that loose-torn drifteth-/Stops that Whale ellida's way; / *Sea-fiends* two the Monster lifteth / High on's back, through boiling spray (Stephens: 102)

Lo! a whale is near Ellida, / Monstrous as an isle to see, / And two hideous *sprites* are riding / On hi back thro' foaming sea (Baker 77)

Lo! like a loosened island gliding, / Black and fearful, swims a whale; / On his back two *sea-trolls* riding, Lash him through the howling gale (Hamel: 97)

See, before Ellide gliding, Like an island floating free, / Sea-whale on whose back are riding, / Loathsome *goblins of the sea*. (Holcomb&Holcomb: 96)

ここではじめて troll が実体を持った怪物として描かれる。Tegnér は troll という語もしくは語要素を、原詩で10回使用している。それらの各翻訳語との対応表は巻末に載せた（資料1）。興味深いことに、Hamel は Canto III,1.124 の訳では spectre つまり実体がないもののように解釈をしている。しかし Canto X では一カ所を除き troll という語をそのまま用いている。それに加えて注目をすべきことは、Canto XI, stanza 26, 1.3 で原詩に troll och jättar という語句が登場するときの各訳者の訳語の選び方である。上に見たように、Canto III, ll. 64-65 の jätte は Latham 以外は giant 「巨人」と訳しているのに、troll och jättar は imps, monsters, goblins, trolls というように、giant という語を用いていないのである。以上のことから得ら

れる結論は、Hamel までは troll はまだ外国語の語彙として認識されているということであり、事実 Hamel は troll という語については註を付す必要を感じてもいたのであった (p.39, note 47; p.101, note 67)。^v

2-2: Benjamin Thorpe, *Northern Mythology*, 2 vols. (1851) の 初 出 例 : Troll-wife, Trollman

ここで考察を必要とするのは、Baker 1841 までは demons, fiends, sprites という語群であり、Hamel (1874) および Holcomb&Holcomb (1877) になると trolls, goblins という「定訳」へと向かっていることである。Holcomb&Holcomb はアメリカでの訳で、イギリスに広まりつつあった troll という語彙の定着はまだ見られないことが確認できる。このことから、1850年代から1860年代に、イギリスの英語話者の間に、それまでとは異なる超自然的な存在もしくは生き物としての 'troll' という語が定着したという仮説をたてるのが可能となる。

それを裏付けるように、*OED* の 'troll' の引用例では、troll- を含む複合語で最も早い例として1851年の Thorpe, *Northern Mythology* からの troll-wife を含む一文が引用されている：'Hedin, we read, returning home one Yule eve, met in the forest a Troll-wife riding on a wolf, with a rein formed of serpents, who offered to bear him company (1: 113-14)'. しかし、*OED* では1865年が初出とされる 'a magician or wizard' を意味する trollman も既に Thorpe の本に出ているのである：

The *trollman* and the witch could, like Harthgrebe, assume various forms, make themselves little or big, ugly or handsome; also invest themselves with the likeness of a whale or other animal, as the trollman sent by Harald Bråtand to Iceland, and the *troll-wife* who, in order to kill King Frodi, transformed herself to a sea-cow, and her sons to calves (Thorpe I: 215-16; emphases added).

Trollmen, it was believed, could derive much aid from certain animals: thus the art of interpreting the voice of birds is spoken of as a source of great discoveries (Thorpe I: 216; emphases added).

A man became 'freskr,' i.e. capable of seeing the concealed *trollman* by looking under another's arm placed a-kimbo on the left side. Even to the glance or look of the eye an extraordinary effect was ascribed, sometimes harmless, as Svanhild's when the horses were about to trample on her, or as Sigurd's, whose sharp glance held the most savage dogs at bay; sometimes pernicious. The effect of either might be neutralized by drawing a bag over the head, by which process the *troll-man* lost his power (Thorpe I: 217;

^v p.39, note 47: 'Trolls are evil spirits under the command of man, when invoked by incantation'; p.101, note 67: 'Ham and Hejd. The Trolls under Helga's command, two names expressing the terrors of the sea. Hejd, is check, frost, counteraction, repulsion. Hamn, ghost; Hamn-glaim (Hamn-glömska), shadow, oblivion'. Ham と Hejd はそれぞれ index で 'a troll' と紹介されている。

emphases added).

THE WERWOLF. That there were persons who could assume the form of a wolf or a bear (Huse-björn), and again resume their own, is a belief as wide-spread as it is ancient. This property is either imparted by *Trollmen*, or those possessing it are themselves *Trolls*. In the *Volsunga Saga* we have very early traces of the superstition (Thorpe II: 18; emphases added).

ここでは Thorpe も *Volsunga Saga* の第5章の記述を参照しているが、Morris&Magnússon の英訳を20年近く先行している。明らかに Thorpe の *Northern Mythology* は troll という語を借入するにあたって大きな意味を持っている。ただし、その意味は「魔術」「魔法」を用いる存在としての troll であった。その後の Hamel による Tegnér の Frithjófs saga の英訳によって、初めて体の大きな存在の troll が英語に登場することになったと結論づけられる。

2-3. Asbjørnsen and Moe, *Norske Folkeeventyr* の英訳

Peter Christen Asbjørnsen と Jørgen Moe の編纂した *Norske Folkeeventyr* (『ノルウェー民話』) の1843年に出版された第一巻から46編の物語を英訳した *Popular Tales from the Norse* が出版されたのは Thorpe の *Northern Mythology* の8年後の1859年だった (Wawn, 148)。George Webbe Dasent によるこの翻訳は初版1000部を3ヶ月で売り切る人気を得て、今日まで至っている (Wawn 150)。^{vi}

Dasent の訳には troll という語がそのまま使われている。ノルウェー語原典とは異なり、Dasent の初版には挿絵はついていなかった。初めてノルウェーの巨人のトロルが挿絵としてイギリス人の目に展示されたのは、*Norske Eventyr* と Peter Chr. Asbjørnsen の *Norske Huldreeventyr og Folkesagn* (1845-48) をノルウェー語原典から抜粋した H. L. Brækstad による英訳 *Round the Yule Log: Norwegian Folk and Fairy Tales* (London: Marston, Searle, & Rivington, 1881) まで待たねばならなかった。さらに Brækstad による *Fairy Tales from the Far North* (1897) は、あらためて *Norske Eventyr* のノルウェー語版の挿絵をいれた民話集となった。

北欧語、特にこのような神話に基づく民話の中に広まった troll という語に関しては、Rudolf Simek による端的なまとめが理解を助けてくれる：

Troll (ON *troll*, 'fiend, monster, giant'). One of the terms for giants in ON (together with *jötunn* and *þurs*). It is a name denoting only hostile giants. In the literature of the High Middle Ages the trolls take on more of the meaning 'fiend' so that they become a being

^{vi} Dasent の訳はそれぞれの話自体が一冊の刊本などになって、その後も出版され続けた。日本では Kay Nielsen の挿絵がついた岸田理生訳 (『太陽の東 月の西: 北欧伝説』新書館, 1979) やマーシャ・ブラウンの挿絵のついた瀬田貞二訳 (『三びきのやぎのがらがらどん』福音館, 1965) などがある。

in their own right among the beings of lower mythology to whom certain magical powers were ascribed, especially in the areas of illness and black magic. In late medieval Icelandic legendary fiction and in West Scandinavian folklore even in modern times the trolls play a greater role than the giants. They are described as being bigger than people but extraordinarily ugly. They live in mountain caves and frequently harm people. They are partly identical with the living dead, the *draugr*.

In Swedish and Danish folklore on the other hand troll is the name used in general to denote all the beings of lower mythology, as well as being the name for a kind of brownie-like being, the *huldrefolk* which often plays a role in changeling tales (Simek, 'Troll', 335).

このように見ると、Dasent や Brækstad を通じて、英語の中にスウェーデン系ではなく、ノルウェー系の巨人のトロルのイメージが浸透していったと考えることができる。

3. Tolkien, *The Hobbit* (1937) によるトロル

本論の冒頭でも述べたように、OED は英語の履歴書のようなものとも考えることもできるが、その編纂作業の最終段階となる W の項目の reader として働いたのが、後に Oxford 大学で Bosworth-Rawlinson Professor および Merton Professor of English となる J. R. R. Tolkien だった。その Tolkien の作品 *The Hobbit* と *The Lord of the Rings* (1954–55) に登場する troll について、Gilliver, Marshall および Weiner の共著である *The Ring of Words* には、troll が英語に浸透するに至った経緯について、Dasent や Brækstad のような民話集のみならず、Henrik Ibsen の *Peer Gynt* (1876年クリスティアニア (現オスロ) 初演) にも影響力があったとする見方が紹介されている。本論 1 で確認した OED の記述を紹介した後、'This word [troll] is not (as far as we know from surviving evidence) an ancient term in English (203)' と次のように述べる：

Trolls soon made themselves at home in English fairy tales—and were no doubt further popularized by the success of Henrik Ibsen's *Peer Gynt* (1867)—but scarcely feature in Tolkien's early writings, being mentioned only in an outline of the incomplete 'History of Eriol or Ælfwine' (*HME* II. 283). They make their entrance in fairy-tale mode in *The Hobbit* as oafish, man-eating, giant-sized creatures that are turned to stone at sunrise, and then reappear in *The Lord of the Rings* in more malevolent and powerful guise in Moria and in the armies of Sauron (203).

しかし、troll が人口に膾炙するに当たって、本当に *Peer Gynt* が影響があったか否かについては reference もあげられていないので確かではない。もともとは Asbjørnsen の *Norske Huldreeventyr og Folkesagn* に含まれた *Peer Gynt* のトロル退治の話がもとになって作られた Ibsen の戯曲では、troll たちは小悪魔のような妖精・妖怪の類である。唯一理性を働かせ

るのも Dovregubben すなわち「ドヴレ山地の老翁」と名付けられた妖精なのであって、troll たちは彼の子どもたちということになっている。Peer が自分の娘と結婚する気がないことがわかった Dovregubben は、trolldungerne すなわち年若い troll たちに向かって 'Børn!' と呼びかける (Ibsen 77)。^{vii} ここで Dovregubben 自身は troll であるとは Ibsen は書いてはおらず、1892年に出版された英訳本でも The Old Man of the Dovrë となっている。Archer の英訳では、やはり Dovregubben に二幕 6 場で 'children!' と呼ばれる 'troll-imps' らは (Archer 訳 84), 'Characters' すなわち登場人物紹介の中では Troll-maidens and Troll-Urchins と呼ばれ、それらはまた brownies, nixies, gnomes といった妖精たちとは区別されている (Archer 訳 'Characters')。^{viii} いずれにせよ、Peer Gynt からは、後の Tolkien の中に登場する troll は想起されないであろう。

Tolkien の *The Hobbit* をはじめとする一連の作品が troll のイメージを英語話者に広げたとするのは、民俗学者 Katharine Briggs である。彼女の『妖精事典』には、troll は trow として項目にあげられているが、その中で次のように述べる：

トロー Trows

シェットランド諸島のトローは、どこかで北欧のトロールと結びついているようである。トロールの中には巨大で妖怪じみ、大ブリテン島にすむある種の巨人のように首をいくつも持ったものがあるし、また中には人間並みの背丈をし、灰色の衣服を着たありふれた素朴な妖精や、さらに大ブリテン島の他の地域の妖精やエルフなどと、多くの点で似通ったものもある。大切なことは、巨大なトロールは太陽の光の中では生きておれず、石に変わるということである。この特性は、J.R.R. トールキンが『ホビットの冒険』(1937) の中で紹介してから、多くの読者の知るところとなった。シェットランド諸島のトローにとっても、太陽の光は同様に危険であるが、生命までは左右しない。日の出のときに地上に残っていたトローは、そこにしばらくつけられた形になり、日没までは地下のすみかに帰れない (ブリッグズ 218-19)。

事実、Tolkien は太陽の光の中では石に変わる、という特性を読者に喚起して次のように描写しているのである：'...trolls, as you probably know, must be underground before dawn, or they go back to the stuff of the mountains they are made of, and never move again (Tolkien 54)'. しかし、Tom Shippey は、このような Tolkien の描写を修辭的文体だと指摘する：

'As you probably know' is here the final blow in Tolkien's strategy of 'counter-realism'. Nobody knows that; indeed it isn't true; in a traditional tale no narrator could get away with so shamelessly exploiting the gap between his world and his listener's, because of course there wouldn't be one! However in *The Hobbit* the combined assurance of

^{vii} 英訳では、Toldunger は Troll-urchins と 'Characters' では紹介されるものの、二幕 6 場では Troll-imps となっており、訳語の統一は図られていない。

^{viii} Ibsen の原作でも Trolldomfruer, Trolldunger となって、Tomtegyubber, Nisser, Hougfolk などと区別されている。

Gandalf, the narrator, the trolls and the dwarves outweighs the ignorance of Bilbo, and the reader. As it happens the belief about being underground before dawn is as traditional as belief in trolls and dwarves at all, going back to *Elder Edda* and the end of the *Alvíssmál*, where Alvis the dwarf is kept talking till daylight by Thórr, and so turned to stone (Shippey 86).

このように、実際に troll が石に変わるという物語がなくとも、troll の伝説が生まれたのと同じくらい、魔物が朝の陽光によって石に変わるという信仰は存在したのだ、という Shippey の論にはそれなりに力はある。そして Tolkien がそれを広めたというブリッグズの主張も正しく思える。また *The Hobbit* の完全校訂を行った John D. Rateliff は motif-index にも troll が石に変わるというモチーフがリストに載っていることを挙げ、troll とは呼ばれてはいないものの、*Elder Edda* 中の *Helgakviða Hjörvarðssonar* の中で主人公 Helgi の策略によって女巨人 Hrimgerðr が朝の陽光を浴びて石になるというモチーフを紹介する (Ratcliffe 148)。

4. 結論

本来は、「魔術」「超自然の力」を保持する存在と考えられた北欧の troll は、英語に借入される過程で、主に東-北欧語に残された「魔術」を持つ存在としての troll として考えられ、特に体の大きさの大小に関係なく、大きい者も小さい者も、翻訳される過程で troll という語を用いるようになった。その分水嶺は1851年の Thorpe による *Northern Mythology* の詳細な紹介にあると考えられる。しかし、1937年の Tolkien の *The Hobbit* は、西-北欧語の流れを汲む「巨人」としての troll のイメージを鮮明に残しただけでなく、朝の陽光を浴びて石に変わるというモチーフを troll にもたらすことになった。しかし、Tolkien がそのモチーフを troll に当てはめることになった経緯については、より詳細な説明が求められよう。^{ix}

^{ix} Tolkien のこのモチーフの源泉については、Ito 2012 を参照のこと。

資料1 Tegnér の *Frithiofs Saga* に見られる troll-words とそれぞれの英訳語との対応表

Tegnér*	Latham (1838)	Stephens (1839)	Baker (1841)	Hamel (1874)	Holcomb & Holcomb (1877)
III, 1.71	giant[']s	fiend	giant grim	brute	goblin
III, 1.124	a fiend	the goblin	a hellish sprite	malkin / spectre	goblin
III, 1. 133 trollsång	a wizard[']s song	a Spell-song	an awful chant	troll's incantation	the song of a goblin
X, st.1, 1.4.	fiend	the Goblins	the fiendish brood	Trolls	goblins
X, st.2, 1.2 trollpar	a fiendish pair	Trolls a grim pair	two angry demons	elfins	two goblins
X, st.5, 1.9 förtrollad	fiend- bestriden	bedevil'd	Magic	Weird-like	implacable
X, st.7, 1.17 Trolldom	witchcraft	Witchcraft	Demons	Trolls	Goblins
X, st.8, 1.7 leda havstroll	water- demons	sea-fiends [two] the Monster	hideous sprites	sea-trolls	Loathsome goblins of the sea
X, st. 8, 1.20 trollad val	wild weird whale	spell- charmed whale	ocean monster	monster whale	the conjured whale
XI, st. 26, 1.3 troll och jättar	imps	grim Imps	monsters	trolls	goblins

References

- Asbjørnsen, P. C. *Fairy Tales from the Far North*. Tr. H. L. Brækstad. London: David Nutt, 1897.
- Asbjørnsen, P. Chr. *Round the Yule Log: Norwegian Folk and Fairy Tales*. Tr. H. L. Brækstad, with an Introduction by Edmund W Gosse. London: Marston, Searle, & Rivington, 1881.
- Asbjørnsen, Peter Chr. and J. Moe. *Popular Tales from the Norse*. Tr. George Webbe Dasent. Edinburgh Edmonston and Douglas, 1859.
- Cleasby, Richard and Gudbrand Vigfusson. *An Icelandic-English Dictionary*. 2nd ed. William A Craigie, ed. Oxford: Clarendon. 1957.
- de Vries, Jan. *Altnordisches Etymologisches Wörterbuch*. 20th ed. Leiden: E. J. Brill, 1977.
- The Electronic Middle English Dictionary [MED]*. 2001.
- <<http://quod.lib.umich.edu/m/med/>>

* Tegnér の詩は canto 毎に韻律が異なり、連の構成や行数もそれぞれに違う。Canto III は連に区別されていないので、行数のみを示す。

- Gilliver, Peter, Jeremy Marshall and Edmund Weiner. *The Ring of Words: Tolkien and the Oxford English Dictionary*. Oxford: OUP, 2006.
- Ibsen, Henrik. *Peer Gynt: Et Dramatisk Digt*. 2nd impression. Kjøbenhavn: Gyldendalske Boghandel, 1867.
- Ibsen, Henrik. *Peer Gynt: A Dramatic Poem*. Tr. William and Charles Archer. London: Walter Scott, 1892.
- Itó, Tsukusu. 'Philological "Magic" in *The Hobbit*: A Reconfirmation of Magic, Wizardry, Runology and Trolldom for Tolkien'. 2012 (In preparation).
- Morris, William and Eiríkur Magnússon, tr. *The Story of Volsungs and Niblungs*. London: F. S. Ellis, 1870.
- Oxford English Dictionary Second Edition on CD-ROM* (v. 4.0). [OED]Oxford: OUP, 2009.
- Peter [of] Langtoft's Chronicle*, 2 vols. 1725. Ed. T. Hearne. London: Samuel Bagster, 1810.
- Ratcliff, John D. *The History of the Hobbit*. 2 vols. London: HarperCollins, 2007.
- Shippey, Tom. *The Road to Middle-earth*. Rev. and expanded ed. London: HarperCollins, 2005.
- Simek, Rudolf. *Dictionary of Northern Mythology*. Tr. Angela Hell. Cambridge: D. S. Brewer, 1993.
- Tegnér, Esaias. *Frithiofs Saga*. <Internet Text File> Project Gutenberg.
<<http://www.archive.org>> (Searched 31 November 2011)
- . 'Frithiofs Saga' *Esaias Tegnèrs Samlade Skrifter*, vol.1. 4de upplag. Stockholm: P. A. Norstedt & Söners, 1874, 1-198.
- . *Frithiof, A Norwegian Story*. Tr. R. G. Latham. London: T. Hookham, 1838.
- . *Frithiof's Saga*, A Legend of the North. Tr. George Stephens. Stockholm: A. Bonnier, 1839.
- . *The Saga of Frithiof: A Legend*. Tr. Oscar Baker. London: Edward Bull, 1841.
- . *Frithiof's Saga*. Tr. William Lewery Blackley. New York: Leopoldt and Holt, 1867.
- . *Frithiof's Saga*. Tr. Leopold Hamel. London: Trübner, 1874.
- . *Fridthjof's Saga: A Norse Romance*. Tr. Thomas A. E. Holcomb and Martha A. Lyon Holcomb. Chicago: Scott, Foresman, 1876 [S. C. Griggs, 1876]
- Thorpe, Benjamin. . *Northern Mythology Comprising the Principal Popular Traditions and Superstitions of Scandinavia, North Germany, and the Netherlands*. 2 vols. London: Edward Lumley, 1851
- Tolkien, J. R. R. *The Hobbit: There and Back Again*. 4th ed. London: HarperCollins, 1995.
- Tolkien, J. R. R. *The Lord of the Rings*. 50th Anniversary Deluxe Edition. London: HarperCollins, 2004.
- Tolkien, J. R. R. *Farmer Giles of Ham*. 1949. 50th Anniversary Edition. Ed. Christina Scull and Wayne G. Hammond. London: HarperCollins, 1999.
- Tolkien, J. R. R. *On Fairy-Stories*. Expanded ed. Verlyn Flieger & Douglas A. Anderson, eds. 1939, 1947, 1988. London: HarperCollins, 2008.
- Völsunga Saga ok Ragnars Saga Loðbrókar*. Ed. Magnus Olsen. København: S. L. Møllers Bogtrykkeri, 1906-08.

Wawn, Andrew. *The Vikings and the Victorians: Inventing the Old North in 19th-Century Britain*. Cambridge: D. S. Brewer, 2000.

伊藤盡「第六章 トールキンのファンタジー：想像力の源泉としての中世英語・北欧語文献学」『探求するファンタジー：神話からメアリー・ポピンズまで』成蹊大学人文叢書7。成蹊大学文学部学会編 東京：風間書房，2010，181-225.

ブリッグズ，キャサリン編著『妖精事典』平野敬一，井村君江，三宅忠明，吉田新一共訳 富山房，1992.

(2011年10月30日受理，11月30日掲載承認)